



南方に關する俚諺

山中 彰 二

の方では崑崙が怖い。針が
迷ひ舵が亂れ人も船も残ら
ない。

(上怕七州、下怕崑崙、針迷
舵失、人船無存)

「明史、寶島傳」より。十
四卷)

合羅里國は海中の小國であ
る。土地は瘠て山が多い。山外
の大海には魚介類が非常に多
い。人民は耕作を心得てゐる。
その國は又羅里務ともいふ。呂
宋に近い。商船が往來して漸次
富裕になつてゐる。中華の人が
その國に行つても之を欺いたり
馬鹿にしたりすることはない。
取引は極めて公平である。それ
で中華の人は次の如くいつてゐ

といふのは、右にのべた様な次第に由るものである。「宦遊紀聞」より。(八十四卷)

西洋に往く船乗の諺

崑崙山といふのがあつて大海の中に横はり、占城及び東西竺と相對峙し相呼應してゐる。その山は方く廣くそして高い。その海が即ち崑崙洋である。西洋に往くものは皆耐風を待つこと七晝夜にして始めて通過することが出来るといふ。その爲に船乗には次の様な諺がある。

上の方では七州が怖く、下

佛の脚に抱きつく

以下は杜文瀾の「古語釋」より譯出したものである。各項末尾の括弧内の數字は當該傳説の出てる同書の卷數を示す。

暨南の南に番國が一つある。佛敎に對する信心が頗る厚いのである。ある時死刑に値ひする罪を犯したものがあつて、國王が之を捕へようとした。その人は非常に恐れてさる寺に逃げ込んで佛像の足に抱きついた。悪かつた、もう二度と過をくりかへしません、髪を剃つて僧侶になりまますから何卒御ゆるし下さい、としきりに懇願するので、王様は之を許し、その罪を問は

れなかつた。その人はつひに髪

を剃り、禪衣をまとひ、願敎を奉ずる様になつた。それでこの國には僧侶になる人が多いのである。時々この國から中國に來るものがあるが、皆自分のことを番僧と稱してゐる。併しそのわけは更に明かではない。俗諺

普段は線火もあげないがいざとなると佛の足に抱きつく

(閑時不燒香、急來抱佛脚)

金持にならうと思へば糞里務へ行け

(若狭、須往糞里務)

「明史、合羅里國傳」より、(十四卷)

三佛齊國港に關する假説

當時爪哇は已に破れてをり三佛齊はその國に據り、國名を復港と改めた。十五州を統轄してゐる。土地肥沃で農耕に適し

一年穀物を作れば三年のみ入り

(二年種粟、三年生金)

といふのは、收穫が豊富にして利益が大きいことをいふのである。「明史、三佛齊國傳」より。

一 (十四卷)

真臘に關する假説

その國は城壁周圍七十餘里、

廣さ數千里である。國中に金塔、金橋と殿宇三十餘個所がある。

王は年に一回會合を催し、

玉環、孔雀、白象、犀牛を前に

ならべる。之を百塔洲といふ。

食物は金の皿や碗に盛る。その爲に

富貴貧賤

といふ賤がある。人民も極めて

裕で、稻は一年に數回登る。「明

史、真臘國傳」より。(十四卷)

鬼門關

嶺南道は容州下都督府北流州

の管轄に屬する。漢の合浦縣の

地で附は北流縣を置いた。南の

方三十里の處に向合つてゐる。

二つの石がある。その間の廣さ

は三十歩で、俗に鬼門關と呼ば

れてゐる。漢代の伏波將軍馬援

が林邑の蠻人を征伐した時に此

處を通り、碑を立てた。その處と

なつた石礎は今も残つてゐる。

昔交趾に行くには皆この關を

通る。關から南の方は瘴癘の氣

に満ち、ひとたび行けば生き歸

るものは甚だ少い。賤に次の如

く謂つてゐる。

らぬ

鬼門關、十人の内九人は歸

「大唐書、地理誌」より。(十二卷)

卷)

火で開製されるから生のもが

得られる筈がない。又檳榔を生

食するには必ず扶留藤と古賀灰

とを配合しなければならぬ。

之をかんで紅い水をはきすて

と滋味がとれて口中がなめらか

になり、消化を助ける。この三

つは相去ること甚だ遠く性質も

各々異つてゐるがこの様に調和

し合ふのも亦不思議なことであ

る。この爲に俗言に

扶留あつての檳榔

(檳榔爲命頼扶留)

と謂はれてゐる。古賀灰は即ち

檳榔灰のことである。實は蚌の

鈎訛したものである。瓦屋子灰

を使つても差支はない。本草綱

目、卷三十一、果部」より。(三十八卷)

檳榔

古實は杜鰲の次である。扶留と楨榔と三つ合して食べて始めてよい味が出る。扶留藤は木防已に似てゐる。扶留と楨榔とは生へる處は互に離れ、性質も甚だ異つてゐるが而も互に調和してゐる。俗語に謂ふ。

楨榔扶留は憂を忘れしめる
(楨榔扶留、可以忘憂)

「臨海異物志」逸文、「齊民要術」卷十及「御覽」卷九百七十五より。(三十卷)

海南風土誌

海南地方は暑い時が多く寒い時はほんの僅かである。木の葉は冬も夏も常に青く、凋落するものは四時共にあつて、中國の様に秋冬の季節があるわけではない。天候又然りて、四時共に晴れてゐる時はひとへを着るが、

夏つて來ると急にひとへを何枚か重ねる。誌に
四季共に夏であるがひと雨降ると秋になる。

(四時皆是夏、一雨便成秋)と謂つてをり、次又の如く謂つてをる。

急いで脱いで急いで着るの
は葉をのむよりも効く

(急脱急着、勝如服藥)
「海樓餘錄」より。(三十一卷)

阿枝國の季節

阿枝の氣候は夏の如くに暑く、霜や雪がない。春に雨が降れば屋根を修繕し道具をしまひこむ。夏中雨が續き、街の踊りが河となり、建物に及んで出入が出来なくなる。七月に至つて始めてあがり、八月の半ば以後に晴れる。冬に至つてもそうで

ある。三月に又雨が降る。誌に
半年は雨が降つて半年は晴れる

(半年有雨半年晴)

といつてゐるのはこれを指す。
「瀛洲野覽」より。(三十一卷)

三佛齊國の習俗

三佛齊は西北の方は海に接してゐる。船が淡港タムバサランに入り彭家裏に入れれば小船に乗換へ、港に入れその國に達する。土壌が肥え人口稠密で土地は耕作に適してゐる。誌に

一回田植すると三回稻刈が出来
る

(一季種田、三季收稻)

と謂つてゐるのは收穫の多いことを指すのである。「瀛洲野覽」より。(三十一卷)



○神田喜一郎氏 九月上旬香港へ出張せらる。

○瀧田貞治氏 内地及中華民國の出張を終へられ九月下旬歸京。

○工藤好実氏 内地出張中の歸京。

○中村 哲氏 九月下旬内地へ出張せらる。

○香坂順一氏 九月下旬廣東より歸京せらる。

○森 於菟氏 九月三十日附醫學部長に就任。

○陳 紹馨氏 山中彰二と改名せらる。

○長谷川 正氏 海南海軍特務部衛生課に轉任。